

令和二年度 桜蔭中学校入学試験問題 (国語)

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

★登山がスポーツなのかどうかについて私見を述べてみたい。

まず登山云々の前にスポーツとは何かということについて考えてみたい。

私の考えではスポーツとはある一定数の人が活動していることと、舞台が整っていることの二つが成立条件になってくと思う。一定数の人がいることはいいとして、問題は後者のほうだ。舞台が整っているというのは、一つには文字どおり競技の舞台が用意されていることを意味する。野球でいえばスタジアム、ボクシングならリングだ。屋外でおこなわれる競技も、マラソンやトライアスロンなどは決まったコースから外れると失格になるので本質的には施設内と同じだ。また舞台が整っているということは、主催者により競技者の安全が——たとえそれが名目的であっても——確保されていることも意味している。ボクシングでは二人のファイターが野放図に死ぬまで殴りあうわけではない。事故で亡くなることはあっても、そうならないようにルールを設けて制限しているわけで、これもスポーツの舞台性を形成する重要な要件であろう。

そう考えるとトレイルランニングや山岳マラソン、アドベンチャーレースなどは、登山と同じように山や自然を競技の場とはしているものの、明確にスポーツだと規定することができる。マラソンなどと同様コースが決まっているし、万が一の事故や急病に備えてスタッフや医療関係者が各所に配置されている。もちろん自然が舞台なので亡くなったり怪我したりするリスクはあるだろうが、そうならないように主催者は全体に配慮の網をかぶせている。またグレンデクライミングも、岩場の開拓者がルートを整備したりトポ(ルート図)を発行したりして安全の確保やルール作りに取り組んでいることなどを考えると、スポーツだと考えてよさそうだ。

さて登山はどうだろうか。登山の場合もちろん舞台はあるが、それが整っているとはいえない。登る山とルートが決まっていたとしても、当日の天候やルート状況によっては変更することが頻繁に起こるし、長い縦走や継続クライミングの場合などは、**変**化する自然状況に柔軟に対応してルートを変更したり、エスケープしたりすることのほうがむしろ多いぐらいだ。それどころか、途中で目標を変更してまったく別の山に登る、などということもないわけではない。これがスポーツだったら完全に失格だが、登山では予定通りに登れなくても必ずしも失敗というわけではない。そしてその融通無碍なところが登山の魅力だったりもする。

それに登山にはゴミを捨てないだとか、岩には無駄にボルトを打たないなどといった倫理はあっても、スポーツにあるような堅苦しいルールや行動範囲を縛りつける規制は、今のところ存在しない。どの山をどのように登るかは個人の好みや技術、体力にに応じて思い思いに決定することができる。また当然、主催者がいるわけではなく、自分で安全を確保しながら登ることが原則となる。つまり登山とはスポーツのように第三者が舞台を整えてそこで競技するものではなく、自分で舞台を**拵**えておこなう自己**①**カンケツ型の行為だといえる。

ではスポーツではないとすれば何なのか。私はその本質は旅だと考えている。旅の本質とは何か考えてみると、それは今日の判断が明日の自分の成り行きを決定するような時間の流れのなかにある。たとえば、とある国を旅していたときにAという町にたどりつくとする。本当は明日にでもB町に移動するつもりだったが、A町がすっかり気に入ってしまったので二週間ほど居つくことにした。すると町の食堂で少し怪しげだが気のいいXという人物と親しくなり、C町に日本への留学経験のある友人がいるから会いに行かないかと誘われた。しようがないからとC町に行ってみると、その留学経験のある友人の娘がたいそう美人で……というのが典型的な旅である。

このように旅とは予定調和に終わらず、その場の状況や判断によって内容が次々と更新されていくのを本来の姿としている。よくいえば放浪、悪くいえば行き当たりばったりこそ、旅の本質だ。旅をしたときに自由だと感じられるのは、外国に行くことで日本の色々なしがらみから解放されるからではなく、むしろこの判断と成り行きの連動作業を体験できるからだろう。明日以降の自分がどうなるのかわからないなかで判断し、その結果がおのずと自分の運命に跳ね返ってくるのだから、かなり純粋な私たちの自由がそこには達成されている。

私が登山を旅的と感じるのはこの部分だ。登山は天候やルート状況を勘案しながら判断をくだして進めるゲームである。判断が正しければ登れるし、間違

っていれば登れない。判断を間違えると登山者は最悪の場合、死という大きな代償を支払うことになるわけだから、結果として跳ね返ってくる運命の大きさを考えると、旅の最も旅的な部分を抽出したような行為だとすらいえる。

そしてその意味で、登山では旅よりもさらに高度な判断と成り行きの連動作業が経験できる。だから、享受できる自由の感覚も途方もなく大きくなる。この自由の感覚こそスポーツでは決して味わえない旅ならではの感覚であり、自由であるからこそ、登山者は危険にもかかわらず性懲りもなく山に足を運ぶのだろう。★

(中略)

GPSの問題について深く考えるようになったのは北極圏の旅をはじめからである。

北極圏に行くまで私の探検の舞台はチベットやネパール、ニュージーニアの山岳地帯が多かった。山では尾根や谷の地形的な起伏が顕著なので、地図とコンパスさえあれば自分の位置を正確に把握できる。GPSはあってもなくてもどうでもいい存在で、ちゃんと使ったこともなければ、さほど意識したこともなかった。

ところが北極圏の旅では、凍った海水や平らな雪原に覆われたツンドラなど、地形的に目印の乏しい場所を進むことが多い。こうした場所では山とちがいが、尾根や谷のかたちや向きから位置を推測することができず、地図とコンパスで位置を決定することがとても難しくなる。そのため航海と同じように緯度と経度を求めて「航法ナビゲーション」しなければならず、GPSが圧倒的な威力を発揮する。

二〇一一年にはじめて北極圏を旅するまで、私はこのGPSの威力を正確に認識できていなかった。(中略)GPSが登場する前も探検家や航海士は六分儀で天測していたわけだから、GPSを使うといっても六分儀が多少便利になっただけで、機器で航法するという本質に変化はないと、あまり深く考えていなかった。

ところが実際に旅でGPSを使い始めると、これが六分儀と全然ちがう。最大の相違点は、GPSを使うと周囲の自然条件と無関係に現在地を出せるところだ。

六分儀による天測だと、天体の高度を観測して位置を計算するわけだから、太陽だろうと夜空の星だろうと、とにかく外に出て天体観測しなくてはならない。そしてこの観測作業は口でいうほど簡単ではない。

特に極地のような極限的な寒さの中ではハードルが高く、氷点下四十度の寒さの中で向かい風に耐えながら、細かなネジを調整して天体を水平線に一致させるだけでも、極度に集中力が必要となる。しかも観測するうちに、六分儀には自分の吐く息で霜が張りついて星そのものが見えなくなってくるし、三十分も作業していたら手足は寒さでかじかみ、鼻ももげそうになる。

なんとか観測を終えても、今度はテントの中で天体の暦や対数表とにらめっこしながら、観測値を位置情報に変換するための複雑な計算作業に没頭しなければならぬ(ただし計算機があれば、この作業は省略できる)。苦勞がともなうだけでなく、その観測値には少なくとも数キロの**②**ゴサがつきもので、一番困るのは、GPSとちがいが、その結果がどこまで正確に出せているかは観測者には絶対的にはわからないことだ。天測とは、最後は自分の腕を信じるしかなく、その意味では極めてアナログな技術なのである。

ところがGPSを使うと、そういう苦勞がすべてなくなり、夕飯の支度をしながら片手でボタンを数回押すだけで位置情報を取得することができてしまう。しかも、その情報は天測とちがってゴサがほぼゼロの、かぎりなく正確なものだ。

GPSを使うと、本来、旅において最も難しいはずの作業が最も**③**カンタンになるという逆転現象が発生する。それは「前よりも便利になった」という次元をはるかに超える、人間はなぜ冒険をするのかという本質を侵しかねない**A**コペルニクス的な転回だ。

なぜ私たちが探検や冒険をするのかというと、それは行為のプロセスの中に**ある**(自然との関わり方)に秘密があるからだ。

北極が例だとわかりにくいだろうから、登山を例に考えてもいい。私たちが山に登るのは、単に山頂に行きたいからではない。山頂に至るまでの「山との関わりあい」の中に魅力があるからこそ、人間は山に登るのではないだろうか。登山者は山という厳しい自然に規定された世界の中で、少しおおげさないうと、命を懸けた判断をくだしながら山頂を目指している。その過程として見逃せないのは、登山者がその行動や判断をつうじて常時、山になんらかの働きかけをおこなっていることだ。働きかけをして山と関係性を構築することで、登

山者は山から肯定され、今その瞬間、そこに自分が存在しているという感覚を強く持つことができる。

これは何も抽象的な話ではない。クライミングをする人なら、誰にでも岩壁や氷壁を登っている最中に墜落の恐怖でガタガタと足が震えた経験があるはずだ。この恐怖という負の感情をつうじて私たちが獲得できているのは、「氷壁の中に自分が今ある」という明確な自己存在確認である。

周囲の世界との関係の中で、身体的な五感をつうじて自己の存在を確立できること、つまり山からきわめて実体的な存在を与えられることに登山の最大の魅力はあり、逆にいうとそこにはしかないともいえる。

それは登山に限らず、極地探検や外洋航海でも同じことだ。過酷な寒さやどこまでもつづく④大海原によつて実体存在を与えられることに、探検や冒険の魅力はある。そしてこの自己存在確認の感覚は、こちらから自然に働きかけ、関与する⑤リョウイキが広がり、そして深まるほど大きくなる。

ところがGPSを使うと、この自然への働きかけと関与リョウイキが極端に狭くなってしまう。地図読みや天測にはあつた外の世界を読みとるという働きかけがない状態で、いきなり百パーセントの正解が与えられるので、外との関係が薄くなり、自然から存在が与えられているという感覚も弱まってしまうのだ。

GPSを使いながら北極の荒野を歩いていたとき、私は常にB妙なもどかしさを感じていた。連日、寒さや風には苦しめられたし、極限的な空腹にも苛まれたが、それでも私は自分は北極という土地を爪で引つ掻いているだけなんじゃないかという奇妙な隔靴搔痒感を取り除くことができなかった。

肉体的には追い詰められているのに、なぜか？

その理由は、明らかにGPSを使っていることにあつた。そのことには旅の途中で気がついてしたが、しかしもはやどうしようもなかった。

結局このときの旅では「航法」という極地探検においてもっとも基本的な作業を機械に外部委託したせいで、自分が北極の自然とがっちりかみあつているという感覚を最後まで得ることができなかった。GPSを使うと、周囲の自然と自分との間にどうしても壁ができてしまい、その土地の真実の姿を知る機会を奪われてしまうのだ。

(角幡唯介『エベレストには登らない』)

注 ※1 山野を走るレース。

※2 身の処し方がしなやかで、さまざまに変化する周囲の状況にただちに対処できる様子。

※3 天体と地平線との間の角度を測る道具。

※4 その場所の緯度と経度を知るために天体の位置を調べること。

※5 かゆいところに手が届かないようにもどかしいこと。

問一 A・Iにあてはまる漢数字をそれぞれ一字ずつ答えなさい。

問二 線部①～⑤のカタカナを漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

問三 この文章がのっている本の題名は『エベレストには登らない』です。

☆から★までの文章をふまえて、この題名にこめた筆者の思いを考えて説明しなさい。

問四 線部A「コペルニクスの転回」とはどういうことですか。この表現で筆者が言おうとしていることを具体的に説明しなさい。

問五 線部B「妙なもどかしさ」とはどのようなことですか。なぜもどかしいのがわかるように説明しなさい。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「じゃあ、ニウシユを書こうかね」

とうとうユニエイが言つたので、チャオミンは鼻息を荒げて顔をあげた。

「はあーいつ、はいっ」

「みんなでチャオチャオへの言葉を三朝書にして届けよう」

「さ、三朝書？」

はじめてきく言葉を、鼻息交じりにくりかえしたチャオミンに、ユニエイは説明してくれた。

「結婚していく人への思いを文字にして綴るんだ。結婚していく女の人の幸せを、心から願って思いをこめて書くんだよ」

ユニエイは「心から」というところに力をこめて言った。

少し前まで手仕事をしにきていたチャオチャオという人が、結婚して隣の街に行くことになったので、お祝いに贈るのだそうだ。

「言った言葉はときだけだけど、思いを文字にしておけば、チャオチャオは読むたびにみんなのことを思い出せるだろう。ジュアヌ、あんたは特に気持ちをこめてね」

「もちろん」

ユニエイからそう言われて、ジュアヌは神妙な顔でうなずいた。

チャオチャオはジュアヌの結交姉妹なのだそうだ。

「チャオミンはまだ書けないから、これで勉強するといい」

ユニエイはそう言つて、壁にしつらえた棚から、ノートを一冊取りだした。紙を皮の表紙で綴じた古い小さなノートだ。紙の部分は全体的に黄ばんでおちあはさくれたっているが、ユニエイは両手で丁寧に取りあつた。紙は貴重品なので、大事にしくはなくてはならない。

「これがニウシユだよ」

ユニエイはまず表紙を開いた。

「わあ、きれい」

そこに書かれていた文字を見て、チャオミンは目を1た。文字は細くてこまかった。ひとつひとつが形良く引きしまっている。それでいて、流れるようにしなやかだ。まるでシェーインが刺す花の刺しゅうのようだった。見方

によつては文字のどこどころにある小さな丸は、花芯か種のように見える。父さんが書いている文字は角ばつてこつこつしているが、こちらはやわらかく可憐で、やはり全然ちがう文字だとチャオミンは思った。

「まるできれいなお花みたい。いえ、小鳥の「☆」みたい」

この美しさをどう表現していいのかわからなかったが、チャオミンの言葉にユニエイはふつと噴きだした。

「チャオミンは面白いことを言うね。鳥の声なんて言つた人ははじめてだよ」ユニエイは愉快そうに言いながらさらにノートを開いた。

「このノートは、ずっと前からここにあるんだよ。普段、私たちが歌う歌をニウシユであらわしたものが書かれている。これはめでたいときに歌う祝い歌だよ。あんたも上手に歌つてたたる」(中略)

家に帰つたチャオミンは土間に座りこみ、文字の練習を始めた。字が書けるようになったことが嬉しくてたまらない。土間の床に棒で書く。土でできた床は、とがったものでなざると形がつくのだ。

「二つ空には」

口ずさみながら棒の先で書きつけていく。

「蛾眉……、あれ？」

だが、さつそく文字が詰まつてしまい、チャオミンは首をかしげた。

「うーんと、蛾、はどうだったっけ？」

思いだそうとチャオミンがうなづいていると、台所で煮物を作っていた母さんがひよいと顔をだした。母さんはそばに座ると、こうじゃない？ と指を動かした。それは確かに、蛾、という文字だった。

「あ、そうだ！」

チャオミンはすつきりしたが、すぐにまた、あれ？ と首をかしげた。

「母さん、ニウシユを知っているの？」

母さんは文字の読み書きができないはずだ。そもそもあまり関心がないらしく、チャオミンが文字を教わりたいと言つたときも、少し困つたような顔ををした。なのに、分らない字をすぐに書いて教えてくれるなんて。

「インシエンはニウシユなんて書けないよ」

そのとき、突然びしゃんとした声がかこえた。振りかえると、入り口につえをついたイーレイおばあさんが立っていた。

「まあ、お義母さん、いらっしやいませ」

母さんははじかれるように立ちあがり、「すぐにお茶をお出しします」と台所に行つてしまった。隣に住むイーレイおばあさんは、チャオミンの家にしょっちゅうやってくるが、そのたびに母さんはまずお茶の準備をしなくてはならない。それが客に対する最低限の礼儀なのだそうだ。

「ハル族の女たちは、文字を持たないの。ニウシユの読み書きができるのは、漢族の女だけだよ」

面白くなさそうに言いながら、イーレイおばあさんはつえを頼りによたよたと歩いてくると、「よいしょ」と上がり口に腰をかけた。(中略)

こうしてチャオミンは、文字を覚えていった。最初は歌に合わせてユニエイの字を見ながら真似をしていたのだが、少しずつ見なくても書けるようになった。そして、次第に頭の中に文字が浮かぶようになったのだ。

「九つ、黄龍は泳ぐ」

チャオミンはつぶやきながら、握ったペンを板に滑らせた。頭に浮かんだ一文字ずつが、板の上に浮かびあがった。

ここまですべての文字を、お手本を見ずに書けた。

さあ、最後の一行だ。

胸がどくとと弾んだが、チャオミンは握ったペンを止めることはしなかった。頭の中にある文字が消えてしまわないうちに、板の上に移したかったのだ。急ぐような気持ちで、息を詰めペン先を見つめる。

もう歌うこともつぶやくこともできなかった。

――十で、鯉は竜門をはねる

「ふう」

一気に書きあげると、やっと息をもらした。

しばらくチャオミンは、自分の書いた文字をながめた。書いては消しているせいで、板の表面はすっかり黒くなっているけれど、チャオミンが書いた文字がしっかりとそこにある。不恰好で大きさもふぞろいだけれど、まぎれもなく意味を持った言葉だ。

さっきまであんなに急いでいた胸が、不思議なほど静かになっていた。

風のない夜中の麦の穂のように、なぜかそよとも動かなかった。

「書けた」

チャオミンはつぶやいた。小さな声をききとった耳が、震えた気がした。

「書けた」

もう一度、言ってみる。今度は大きな声で。

それを合図にしたように、胸がぼんとはじけた。またどくとと鼓動が騒ぎ始め、体の芯が熱くなる。

胸の内からあぶくのような喜びが噴きだすようにこみあげてきた。**A**内側から湧いてくる痛いほどの喜びに、チャオミンは自分の体を抱えこむように縮めた。この気持ちを外にもらしたくはなかった。(中略 ※3)

シューインは結婚式の日を迎えた。チャオミンとジュアヌが書いた手紙は、結婚のしきたりにしたが、シューインの実家に預けられることになった。三朝書は、実家から贈られる品物と一緒に大切に納められ、結婚式の三日目にシューインに届けられるのだ。

結婚式の前日、チャオミンは机に向かい自分の書いた三朝書をもう一度読み直した。

まだあまりうまくはない。けれどもせめて人一倍の願いだけはこめた。

封をしようとしたところ、母さんがやってきた。

「チャオミン、この手紙も一緒にに入れてちょうだい」

母さんは、小さく折りたたんだ紙をさしだした。

「母さん、手紙を書いたの？」

チャオミンは目を**2**た。

「ええ。母さんもうしても気持ちを送りたかったから」

母さんは恥ずかしそうに笑った。

「読んでもいい？」

チャオミンは返事もきかないうちに紙を広げてしまった。そして、にっこり笑った。そこには、短けれど大切な言葉が書いてあった。チャオミンも大好きな言葉だった。

あわただしく結婚準備を終え、シューインは住み慣れた愛おしい町から花駕籠に乗った。(中略)

新しい家では三日三晩祝宴が続いた。

はじめて会った夫とその両親、それから弟や妹たち。見知らぬ人たちの間で、シューインは自分がどこに座っているのかもわからなかった。強張るシューインにみんなは意地悪をするようなことはなかったけれど、やはり不安でいっぱいだった。

これから知らない人たちと暮らすのだ。

そんな不安をしばし吹き飛ばしてくれたのは、祝宴の途中で届いた、実家からの荷物だった。

シューインは飛びつくように荷物を受け取り、焦る手つきで結び目をほいほい。何はさておき三朝書だ。自分の愛しい人たちにつながる物がほしかった。

「まあ、こんなに」

入っていた三朝書を胸に抱く。**B**愛おしい重さを感じた。生み育んでくれた母や、慈しみをかけてくれた叔母や兄嫁、そして長い付き合いだったユニエイ。

それぞれがくれた言葉の数々を、シューインは吸い取るように丹念に読んだ。特にユニエイからの言葉には励まされた。(中略)

飾りのないまっすぐな言葉に、シューインの背筋はすっと伸びた。日に焼けたユニエイの笑顔が見えるようだった。

三朝書を読みながら、シューインは心が落ち着いていくのを感じていた。さっきまでふわふわとして頼りなく、むなしく散ってしまっていた心に、芯が戻ったような気分だ。言葉に、自分のためにつづられた思いに、こんなにも力があるなんて。シューインは震える指先をおさえつつ、文字を追った。もちろん二人の大切な姉妹からも三朝書をもたらした。ジュアヌは誇り高く整った文章で結婚を祝ってくれた。そして、チャオミンは素直な思いを祈るようにつづってくれた。チャオミンらしいかわいらしい字だ。

「わたしの小さなサンゴの筆で、シューインお姉さんに言葉を送ります
まずはこちらがとうと伝えます

本当に嬉しいご縁があって、わたしたちは姉妹になりました

わたしにとつて、どんなに幸いなことだったでしょう

シューインお姉さんには、たくさんのことを教えていただきました

それなのにわたしには、あなたのためにできることがないので

それが残念でなりません

だからせめて祈ります。この先のシューインお姉さんの幸せを祈ります

この手紙を書いている筆は、サンゴの飾りがついています

サンゴは海の底に眠っているのだそうです

深い深い海の底。その海のように深く深く、わたしは祈ります

刺しゅうもお裁縫も上手なシューインお姉さんは

新しい家のみなさんにきつと大事にされることでしょう

シューインお姉さん、どうかお元気で

ずつと、ずつと、大好きです

チャオミン

シューインは言葉のひとつひとつをすくい取るように三朝書を読んだ。今から先の生活はきつとこれらの言葉が助けてくれる。そう確信できた。

「あら」

シューインが、その紙に気がついたのは三朝書を戻そうとしたときだった。チャオミンからの三朝書の中に、もう一枚紙が入っていたのだ。シューインはその小さく折りたたまれた紙を引っ張りだした。

そこには、こう書いてあった。

C辛いときは、書きましよう
苦しいときは、歌いましよう

ヤン・インシエン

(まはら三桃『思いはいのり、言葉はつばき』)

注

※1 女性だけが書く文字。チャオミンが住む集落では、男たちが野

や山で働いているときに、女たちがだれかの家に集まってい

しよに手仕事をしたりひそかに文字を習ったりする。チャオミ

ンは十歳になったのでその集まりに参加できるようになった。

※2 集まりの中で仲良くなった人同士は「姉妹」となり、かたい

絆で結ばれる。

※3 チャオミンは、あこがれのシューインと結交姉妹になった。
シューインは親の決めた相手と結婚し、遠くへ行くことになっ

た。

問一

1 **2** にあてはまる言葉を次の中から選び記号で答えなさい。

ただし、同じ記号を二度使ってはいけません。

【ア 輝かせ イ そらし ウ しばたかせ エ むい オ 丸くし】

問二

「☆」に、小鳥がしきりに鳴く様子を表す言葉を、文中にあては

まるようにして入れなさい。

問三

線部 **A** について、どのような喜びでしょうか。説明しなさい。

問四

線部 **B** について、「愛おしい重さ」とはどういうことですか。説

明しなさい。

問五

線部 **C** について、チャオミンのお母さん(ヤン・インシエン)がこ

のように手紙を書いたのはなぜでしょうか。説明しなさい。



解答用紙
「国語」

には記入しないこと。

受験番号

()

問五	問四	問三	問二	問一
			④	①
			⑤	②
				③
				ア
				イ



—

問一	問二	問三	問四	問五
1				
2				